

美しい人

(卷二)

三好十郎著

三好十郎

美し人
卷一

美しい人 卷一（全三卷） 定価一七〇円

昭和廿八年十月三十日第二十刷發行

著 者 三 好 十 郎

発 行 者 遠 山 直 道

発 行 所 東京都中央区銀座東六丁目二

株式会社 ダイッ ド 社

電話銀座五三四〇・二〇一三
同興社印刷・黒岩製本



作者の言葉

この「美しい人」という物語は、小説や劇あるいは芝居というよりも、記録または報告に近いものです。事実あったことを、また、現にあることを、なるべくそのまま、あまり飾り立てたり、変えたり、みがきあげたりしないで、なるべくズケズケとありのままにお伝えしようというものです。ですから、多分、すべての芸術の持っている味わいの深さや細かさや、それから、たいがいの劇や小説の中にあるいろいろに入りくんた、派手な面白おかしさなどは、この中にはあまりないかもしれません。その代りに、事実そのもの——つまり実際にあった事、現に今ある現実の中にいつでもある生々々しい興味や、それから、真実の事、ホントの事がらの中にいつでもつき添っている美しさといったようなものは、多少あるはずです。

ところで、なぜ私が以上のような事を考えたかと申しますと、戦争が終ってから八年ばかりたって、現在こうして私ども、どうやらこうやら、ともかくやっています、すべ

てがうまくいっているとはいえません。事がらによっては、実にまだ、どうしようもない状態のものもあります、その上に、この先またまたいろいろのゴタゴタした事や恐ろしい事が起きて来るかもしれない不安もあります。

もちろん、このような状態を私どもの力で、どうしようと思っても、そう急にどうにもなるものではないでしょう。しかし、なんとか、こんな状態をシッカリと見定めて、それについての私どもの考えを少しはハッキリさせて置かなくてはならないような気がします。それには、私どもの身のまわりを冷静に見まわしたり、その身のまわりの物や事が、今あるようになって来た過去からの、つながりの糸を靜かにたぐって見る必要があります。ではないかと思っています。

こころみに、今から十四五年前までさかのぼって、私どもの歩いて来た道をふり返ってみます。すると、その中には恐ろしい戦争の時期がふくまれています。戦争前にしても、戦争後にしても、つらい事や苦しい事が一ぱいありました。だから、時にイヤな気がして、ふり返りたくないと思う事があります。しかし、にもかかわらず、これは他人の過去ではない。自分が歩いて来た道です。自分が生きて、歩いて来た道です。その道には、恐ろしい事や苦しい事の方が多かったとしても、良い事や、楽しい事が、まるでなかったと

はいえない。少くとも、私どもは、ほかのように生きて来られなかった、こうしか歩いて来られなかった、良くも悪くも自分たちの十四五年間はこれだけしかなかった、という意味で私どもにとって大切な月日であったと思わないわけにはゆきません。それに、もし私どもが今後、多少とも良く生き得るものならば、そのための小さな芽やカケラが、過ぎ去った十四五年の間にもあったはずで、それが完全にかくされていたとは思われません。そして、そのような事を知り、跡づけるためには、私どもは、十四五年の過去を、そのありのままの姿を、少なくとも、出来るだけありのままの姿を、すべての紛飾をこそぎ落し、赤裸かのままで、時によってそれが私たちの眼にいとわしく見えることがあっても、正面からヒタと見なければなりません。私は私に及ぶだけの力で、この作品によって、それをして見ようと思いたったわけです。

私は十四年前にさかのぼり、その頃からの日本の歩いて来た道をふり返り、跡づけて来て、現在に至ろうと思ひます。それを、数人の人たちの生活の歴史、ことに二人の女性、この十四五年を懸命に生きて来た姿を通して、それをしてみたい。これらの人々は、私の知っていた人たちですが、格別変った人たちではありません。二人の女性も、いわばごく平凡な人たちで、これと同じような人は、気をつけてごらんになれば、あなた方の周

困にも、たくさんいるに違いありません。いや、現にそうして今、これを請んでくださっているあなた御自身にしても、三年前、五年前、十年前のことをちょっと思い出して見てください。

実にいろいろの目に逢い、恐ろしい、変化の多い激しい流れにもまれて来ていられる。一人々々が、うにいいないさまさまの思いをへて来ているのです。それが、いわば、この十四五年間の日本の歴史なのです。

それを、その十四五年間のことを、数人の人たちの姿を通して、しっかりと、そして靜かに眺めて見ましょう。それに、どんな意味があるのか、また、その事から、今後私どもがどうやつてゆけばよいか、一切、私にはわかりません。ただ、私に出来ることは、私の知っていた、また現に知っているこれらの人々の、ウソもかくしもない姿をあなたがたの前に持ち出して見ることだけです。そして、それを間にかこんで、あなたとごいっしょに考えてみようと思うだけです。

春の上野公園

話は、今から十年ばかり前、昭和十八年の四月にさかのぼる。

昭和十六年の十二月八日、日本特攻隊による真珠湾攻撃にはじまった太平洋戦争がすでに一年あまり経過した頃で、当時、軍の当局や情報局などでは、戦況は日本軍に非常に有利に展開しつつあるような事をいっていたが、実際においては、そうではなく、各方面でひろげすぎた戦線を維持するのに喘ぎはじめ、方面によっては敗色^{あせ}蔽^{おほ}いがたくなって来つつあった。しかし国民の大部分は、そのことを知らされずにいて、ただ国民の中の敏感^{びんかん}なものだけが、それを感じとって、イライラした、どうにもならない気持ちにかりたてられていた。〈撃^うちてしままん〉とかへ一億一心ととかへ鬼畜米英ととかいうスローガンが、あちらでもこちらでも叫ばれていた時分のことであった。

四月の下旬で、東京都の内外の桜は咲いていたが、人々の心はサワサワと落ちつかず、ゆっくり立ち停^{とど}まって花を眺めている余裕もなかった。上野の山の崖^{がけ}の上などに咲いた桜など、ちょうど見ごろなのに、そのへん一帯シンカンとして、おりから日の暮れ方の斜めの陽の光の所々さしこんだ林の奥に

ほとんど人影も無かった。

……と、そこへ遠くから、

「あゝ、玉杯ぎよくはいに花うけて、緑酒りよくしゆに月の影宿かげやどし、治安ちあんの夢にふけりたる、榮華えいがのちまた低く見て……」
朴齒ほうはの下駄を力強く踏みしめて、その歩調に合せて器量一杯に気概をこめて寮歌を唄いながら、近づいて来る若い学生があつた。そのうしろに少しおくれ歩きながら、これも低い声で寮歌を合唱する若い女——相良浩さがらひろしと石渡美奈子いしわたみなこだった。

「治安の夢にふけりたる、榮華のちまた低くみて、向うが丘にそそりたつ、五寮の健兒意気高し……」
「芙蓉ふようの雪の精をとり、吉野の花の華を奪い、清き心のますらをが、劍と筆とをとりもちて、一度立
たば——」

そこまで唄うと、先に歩いてゐた浩は、ヒョイとうしろをふり返り、ブツンと歌をやめて、心配そうに呼びかけた。

「美奈子さん、どうしたの？ ……どうしたんだ？ え？」

美奈子は二番目の歌詞に入るとすぐ、歌をやめて立ちどまり、とりのこされたまま、浩の後姿をじっとみつめていた。

「……さあ行こう！ どうしたの？」

浩は歩みよって美奈子のふせた顔をのぞきこんだ。

「つかれた？……」

「……うらん」

「ずいぶん歩いたからなあ、くたびれたんだろ？」

「うらん」

「どうかしたの？」

「なんでもないの」

「なんでもないやつが、どうしてそんな変な顔をして立ちどまつたり——どうしたの、ほんとに？」

「……浩さんが急に小さくなっちゃったんですもの」

「え？ 小さくなったって？ 僕が？ それどういう——？」

「あたしね、うしろから歩いてきながら、ヒョッとね、このまま浩さんがズンズンズン前の方へ行ってしまうはせぬかと、ヒョイとそういう気がしたの。そしたら、ドキンとしたの。それで、立ちどまつて見てると、そうやって、桜の枝をふりふり歌を唄いながら、浩さんがズンズン向うの方へ、小さく小さく、豆つぶみたいに小さくなってゆく。見ていてあたし、つらくてつらくて……」

「馬鹿だなあ、美奈子さん、急に神経衰弱にでもなったんじゃないか？」

「そうかも知れないわ、けど、とにかく豆つぶみたいに小さくなって、まもなく浩さんがどっかへ消えていっちゃまいそんな気がしたんです。悲しくて悲しくて、自分の身体が地面の中に落ちこんでゆく

ような気がしたの。あたし、お姉さんの気持がわかる様な気がする」

「姉さん？ 姉さんがどうしたんだよ？ そんな事が、なにも姉に關係した事じゃ無いじゃないか？」

「いえ、ちかごろの浩さんの、この、いろんな物の考え方、お姉さんが心配なさっている——その、どうにかすると、どうかへ行っちまいそうな浩さんのことを、お姉さんは——」

「姉は、ありゃ違うんだ。あれはただ自分本位の、いや僕という肉身の弟をねこっ可愛いがりに可愛がっている気持から、つまりそういうエゴイズムから来た一種のヒステリイなんだ」

「違います！ そんなことはないと思うわ。お姉さんの気持は、あたしよくわかる。エゴイズムだなんて、そういう浩さんこそ、ほんとにエゴイズムじゃないかしら？」

「何がエゴイズムなんだよ？ ……いや、姉のことなんかどうでもいいんだ。もうよそうよ。せっかくこうして美奈子さんと二人きりで歩ける時間に、つまらない。姉のことなどを割りこませることはないんだ。姉は姉で、兄さんとよろしくやればいいんだ」

「そら、そんな残酷ごんくなことを浩さんはいうのよ、お姉さんの気持など、浩さん、まるでわかっちゃいないんだわ。今日だってわざわざあたしを呼んでくださって、お弁当までこさえて、こうして二人をピクニックに出してくださったのはお姉さんだわよ。それを思うと——」

「そういう姉のセンチメンタルな、まるでねずみの愛情みたいな愛情が、僕は近頃いやでしょうがないんだ」

「だって浩さん、あなたの方の学校の訓練もだんだんひどくなり、あたしも挺身隊ていしんたいの方に入るとなると、ゆっくり二人きりで話せるのは、当分、これが最後になるかもしれないよ？　そこまでお姉さん考えてくださって、こうして出してくださったのよ。だまっていらっしゃるけど、あたしにはそれがわかるのよ」

「そういうのをねずみの愛情だというんだ。僕はもう子供じゃない。美奈子さんだって子供じゃないんだ。姉の話など、もうよそう。……ああそこに綺麗に咲いている桜がある。あの辺で少し休もう」
「ええ」

「元気を出してくれよ。そうなんだ、当分これが最後になるかもしれない。その僕らの今日の時間はあと三十分位しかないんだよ。ね、さあさあ！」

「ええ」

浩は寮歌をハミングで唄いながら、また先に立って歩きだした。美奈子も遅れまいとしていると、今度は浩が、ああ！　と、ハミングをブツンとやめて立ちどまった。

「なあんだ！　こりあ、もう駅のま上だ。こんな方角になっていたのかなあ」

「まあ！　こんな崖になっている」

美奈子は、少しはしゃいでそういうと、浩とならんでこわこわと崖の下をのぞきこんだ。

崖のはるか下の方に、大勢の人を呑んだ上野駅の構内が横たわり、そこからの物音がザーと潮騒しほざしの

ようにわきのぼってきた。そして、その向うに花曇りにかすんだ夕暮れの下町が、ポーッと浮いて見えた。若い二人はそのままシミジミとそれらの景色に見惚れていた。

構内のベルが風にのって、思いがけず近くで聞えた。同時にポーという汽笛の響——

「……いいなあ、こうして見ると！ 日本という国は良い国だ！ ね、そう思わない？」

「ええ」

「ほら！ 駅の前からスーッと、人間がコトコト、コトコト歩いている！ あれが日本人なんだ。僕あ、あれを見ると、両方の腕で抱きしめたくなるんだ」

「ええ、ほんとに——」

「こんな連中のためになら、僕あ、どんな仕事でもやれそうな気がする……」

浩は息をつめるようにして眺めていたが、そっくりおわると、いきなり叫ぶような声でぶっきら棒に朗咏ろうぎしだした。

「こころよく、われに働らく仕事あれえ。それをしとげて、死なんとぞ思うウー」

思いきりの朗咏は、人氣のない崖の上に気持よく響いた。美奈子もつられて一緒に朗咏しようとしたが、それもすぐ涙声になって息がつかってしまふ。

「また泣くの、美奈子さん、いやだぜー」

「泣きはしないわ。うれしいの、なんだか」

「だって、眼に一ぱい涙がたまってる。どうしてそう、女なんて、水分が多いのかなあ？」

「浩さんだって、泣いてる」

「バカあ、誰があ！」

「そんじゃ、これなあに？ ほら——」

「美奈子さん！」

浩は自分の眼を指している美奈子の手をとってゆっくりと下におろした。

「あら！ 浩さんの眼の中に、あたしの顔が小さく映っている」

美奈子はその小さな顔をよく見ようとして、自分の顔を浩の顔にすれすれに持っていた。

「ふふ、僕の顔も美奈子さんの眼の中に映ってる……綺麗だ！ 澄んで、水の底みたい……まるで沈んでゆくみたいだ。ねえ！ 僕は——」

その時、出しぬけに崖の下方から、列車の発車の号笛がポーッ！ ポーッ！ と二つ、けたたましく響き、そしてその前から聞えていた機関のエキゾーストの音とともに、多勢が声をそろえて唄う《出征兵士の歌》が、駅の構内から湧き起ってきた。

「わが大君に召されたる——」歌詞はハッキリきこえないが、それはあたかも潮が打寄せるような力強さで、崖の上まで圧してきた。

「ああ、出征する人がある！」

「見えないな、ここからじゃ……二人や三人じゃなさそうだ……」

浩は、伸び上ったりがんだりして、駅の構内をうかがいながら、下からわき起る歌に合わせて低くハミングした。

「よして、浩さん！ あんな歌きくの、今日はよして！ 今日は、あの、浩さんと私の——私たちがけの日なのよ」

美奈子は不意に烈しくそういうと、うん……といったまま、なおも構内の方に氣をとられてハミングをやめない浩の手をとって強くひいた。

「やめて！ 向うへ行きましょ、ね！ 浩さん、いやだ、私！」

美奈子は、浩の手をグイグイひいて崖ぶちから離れ、すぐろの林の奥へと入っていった。その二人を、下からの歌が追いかけるようにせまっていく。

浩は美奈子の急変にあっけにとられて、

「なんだよ？ そんなに、ひっぱるなよ！ どうしたんだよ？」

「今日だけは、私たちのものよ！ あんなの、きいちゃ、いや！ ねえ、そうでしょ？ だから、また、さっきの寮歌、歌って！ ね、歌ってよ！ お願ひ！」

それはほとんど哀願であった。だが、浩の口をついてでた歌は、遠ざかって聞える波の音のような歌「わが大君に召されたる——」

「ちがうっ！　ちがうの！　それじゃない、寮歌！」

「いや、僕あ——」

さっき崖の上で、構内からきこえてきた、あの歌をきいた時、まるで水を浴びせかけられたようになって——そういいかけて、浩は口ごもり、美奈子にたずねた。

「どうしたんだよ、全体？」

それには答えず、

「じゃ、啄木^{たくぼく}でもいいわ。ころよく、われに働く、仕事あれ。それを——」

美奈子は懸命に朗詠の調子をはった。

「それを、しとけて、死なんとぞ、思う」

浩はまったく無感動にいいおわると、死なんとぞ——と調子をはったとたん、急にそれをやめ、死……すぐ死だわ！……と、ひとりごとをいっている美奈子を見た。

「うん……」

「どうして、死なの？　それをしとけて——生きていって、なぜ悪いの？　イヤだ、私は！　どうしてなんですか？」

「良い悪いではない。東洋の生は常に死のかけにある……」

浩は、不意に別人のように、何か死んだ人のように、無感覚な声で話した。

「……いや、絶えざる刻々の死の上に、東洋の生がある。深い安息の淵にのぞんで、そしてやがては、すべてがその淵にのまれる運命に決定されている。だから、生は生なんだ。死があつて、生は生なんだ。ヨーロッパの生は、生があるから生だ。死はただ、生の終りに現われる黒い異様なものだ。人は、だから、ただ生きているだけで、生きることを知っているだけで、死を知らない。それはただ歡迎されないアクシデントたるに過ぎない。生が死によって生かされ、命を与えられ、新しく照らし出されることはない。生はいつまでも生で、だから生は旧くなり、重荷になり、溜り水になって腐る。

……日本の、東洋の生は、絶えず動き、生れ、過ぎ去り、生成する。つまり死ぬ。死によって常に新しく生々と咲き出す花であり、火花であり、瞬間の輝きなんだ。だから美だ。消える運命にあるから、それは美だ。ねー、そんなから、美しいんだ！美奈子さん、君は、だから——」

浩は、話が筋道からそれて、今、自分の眼の前にいる美奈子の美しさを讚美しているのだという事に自分でも気づいていない。

「ちがう！ちがうわ、浩さん！そんなことないわ！」

美奈子は夢中でさえぎった。

「僕らは死を知らなくてはならんだ。死ななければならんだ。早く死んでしまいたい、僕は。美奈子さんと一緒に、僕は死んでしまいたい。死なない、僕と一緒に？」

「そりゃ、そりゃ、死んでもいいわ！浩さんと一緒なら。しかしその事じゃないの、浩さんのいっ